

産地情報

ジャガイモ在来品種“ごうしゅいも”の現状と将来

徳島県西部総合県民局 企画振興部
にし阿波振興担当 課長補佐

若尾 良治

1. 地域の概要

徳島県在来のジャガイモ品種である“ごうしゅいも”の産地は、徳島県西部の山間部、なかでも剣山周辺の三好市祖谷地域と美馬郡一字地域である。これらの地域は標高が高く、耕地面積の割合が低い典型的な山間農業地帯である。多くの集落は標高500～900mの急峻な山間斜面に存在し、農業は畑作中心で水稻作はほとんど見られない。

2. “ごうしゅいも”の特徴

“ごうしゅいも”は古くから前述の地域で栽培されている在来のジャガイモであり、地元では他に“おくいも”、“ほどいも”、“ごうしも”等の名称で呼ばれる。“ごうしゅいも”の特徴は、① 大きさが小ぶりで鶏卵大が最大サイズ。② 肉質は粘質でよく締まり煮崩れしない。煮込むほど堅く締まる。③ 表皮の色が赤系と白系の二種類あり、糖度は収穫後の貯蔵期間が長いほど上がり、その傾向は赤系ほど顕著に現れる。④ 10a 当たり収量は一般のジャガイモよりも低く、500kg程度。⑤ 植付けは3月中旬、収穫は7月中下旬に行われ、祖谷地方では後作にそばを作付ける二毛作の栽培が行われている。⑥ 種いもは生産者の自家採種で賄われている。“ごうしゅいも”の平成22年における生産状況は、作付面積1ha（平成10年12.3ha）、生産量5.0t（平成10年21t）で、減少傾向にある。

3. “ごうしゅいも”から“源平いも”へ

地域の伝承作物であった“ごうしゅいも”は、古くは生産量のほとんどが自家消費され、生産者には「販売」という意識が無かった。しかし、山間部の農業経営を向上させることを目指し、平成9年度から「地域特産作物発掘・導入促進事業」を活用し、

東祖谷山村、西祖谷山村、一字村（いずれも当時）の役場、JA、全農、県（行政、普及、試験研究）が協力し商品化への取り組みを開始した。平成9年度は各機関の協力体制を整備確立するとともに県農業試験場でウイルスフリー苗の作出と種苗増殖のための現地圃を設置した。平成10年度は地域ごとに優良系統選抜圃を設置し、収量性、品質等について検討を行うとともにその結果を受けて栽培暦を作成した。平成11年度は前年同様の系統選抜と展示圃設置を行った。また、この年から前述の関係機関による「源平いも認定委員会」を設立し、栽培技術面の検討を行うとともに、委員会による生産者への生産指導を通して商品性の統一に努め、JAから“源平いも”の商品名で京阪神市場への出荷を開始した。当初は他のジャガイモとの差別化に苦労したが赤白各1kg入りの2kg箱出荷で、特徴をアピールしてからは安定した販売が続いている。

4. “ごうしゅいも”の将来

販売への取り組みから10年余りを経た現在では、生産者数の減少、高齢化による生産規模の縮小、連作による病害（そうか病）の多発等が大きな要因となり、生産量はピーク時の4分の1程度に落ち込んでいる。市場で定着している“源平いも”のブランドを維持するためにも、今後は生産量の確保と品質の維持向上が必須である。そこで、生産量確保のために耕作放棄地解消畑を有効活用し、地域内で活動する農業法人等による大規模生産への取り組みを計画し、また、品質維持のために再度ウイルスフリー苗による優良種苗への更新に取り組み、品質の維持向上を図るべく計画中である。